

今月の言葉は寡聞にして、同義のものを見つけることが出来ませんでした。

・>・>・>・>・>・>・

明朝末、顧炎武こえんぶという有名な学者がおりました。清の軍隊が山海関より侵入して来た時、顧炎武の母親は清兵に右腕の切り落とされてしまいました。弟も殺されてしまいました。国家の敵に家の恨みも重なって、顧炎武の清朝に対する怒りはとても激しいものでした。

彼は、「天下興亡，匹夫有責（天下の興亡は一般の人々にも責任がある）」と主張しました。意味は「民族の存亡には、国民一人ひとりにも責任がある」ということで、彼はこの言葉をこれ以後の自分の行動基準に決めました。

清朝政府は、何回も人を遣わして、清朝のために働くよう要請しましたが、使いの者を全く相手にせず、自分の明朝に対する忠誠心を明確に示しました。

・>・>・>・>・>・>・

**言葉の意味：**匹夫＝一般の人、責＝責任。全ての一般の人にも責任があるという意味で、国家存亡の時期にはよく使われる。

**使い方：**国家の存亡には、一般の人々も責任を負わなければならないというから、すべての中国人は皆、国家の大事に関心を持たなければならない。

・>・>・>・>・>・>・

この言葉、明末清初の学者の言葉で新しいせいか、私が持っている四字成語の辞典には載っていません。今ご紹介しているこの幼稚園児対象の成語の絵本には、日本で出版された四字成語辞典には載っていないものが多々あるのですが、今月のこの言葉は中国の子供向け成語辞典にも載っていませんでした。この本が、有名小学校お受験用の絵本である証あかしでしょうか。

この言葉を言った顧炎武という人は、明末清初に生きた思想家・学者で、清代に起こった考証学の祖とされています。

清の侵略に対して、故郷で義勇軍を組織して清の支配に抵抗し、各地を流浪しながらも、書物を馬に積んで帯同し、文献と現地を照らし合わせた実証的な研究を続け、考証学の手法を確立しました。

彼が方向性を示した考証学は、清代に盛んになりましたが、彼自身は清朝政府の再三の要請にも関わらず、清朝に仕えることはありませんでした。私は、国民が国の政治に参加する道が全くない中国で、このような考え方があることを初めて知りました。

中国の正史は、王朝が亡んだ後、次の王朝の下で編まれるのが常で、前王朝の最後の皇帝は殊更に悪く言われることが多いようです。そのことで現王朝の正当性が裏付けられ、易姓革命の傍証とする為でしょう。

そんな歴史が語り継がれている中国で、国の興亡が一般の人々にも責任があると考えの人がいたということとはとても新鮮な驚きでした。

丁度今、民主主義の先進国と目されるイギリスが、EU 離脱問題で、国としての合意案を見つけられないのを見て、民主主義の限界を見

たような気がしていましたが、この言葉を聴いて、イギリス国民ももう少し真剣に議論して妥協案を見つけるべきだと考えるようになりました。思わぬところから、民主主義の本質を突かれたような気がします。

でも日本も他国のことをあれこれ言う資格はありませんね。友人同士の会話では、政府に対する不満を言い合っている、自分たちの意思表示が出来る唯一の機会である選挙にも拘らず、参加する人が少なく、毎回驚くような低投票率で我々の代表が選出されているのですから。



挿絵：満柏氏